

月刊誌『福音と世界』の6月号に、パレスチナ人自治区にあるベツレヘムの福音ルーテル降誕教会で、2023年12月23日のクリスマスになされたムンター・イサーク牧師の「パレスチナからの説教『瓦礫の中のイエス 哀悼の祈り』」が掲載されていた。1995年に、横浜港南台教会員でツアーを組んでイスラエル旅行に行った。イスラエル旅行はイスラエルに益を与えるだけであると批判されていたので、私はパレスチナ人教会を訪ねたいと、旅行会社に依頼し、ベツレヘムのルター派教会を訪ね、ミトラ・ラヘブ牧師とお会いし、パレスチナ人の率直な思いを聞く貴重な機会を得た。現在、この教会はイサーク牧師が務めているようだ。彼の説教『瓦礫の中のイエス』は極めて緊張感のある、そして、私たちが真剣に聞かなければならない説教なので、その核心部分をそのままの言葉で紹介したい。

「私たちは怒っています。深く悲しんでいます。喜びの時となるはずだったこのクリスマスに、私たちは嘆いています。恐れています。二万人が殺され、数千人が未だ瓦礫の下にいます。9000人近い子どもたちの命が最も残酷な方法で奪われました。毎日その繰り返しです。190万人もの人が帰る場所を失い、住まいから追い出されました！何万もの家が破壊されました。私たちの知っていたガザはもう存在しません。これは全面的な消滅です。虐殺です。」

「南アフリカの友人たちは〈国家の神学〉という概念を私たちに教えてくれました。国家の神学とは、人種差別、資本主義、全体主義といった現状を神学的に正当化することです。これは、神学的概念や聖書の内容を自らの政治目的のために意図的に誤用することによって行われます。ここパレスチナでは、聖書が私たちが攻撃する武器にされています。私たちの神聖なる書物がです。パレスチナで私たちは〈帝国〉について話します。ここで私たちが直面しているのは、帝国の神学というものです。これは優越性、支配性、選民思想、権利の一方性といったものを隠すための覆面です。この神学は時に、宣教や布教、預言の成就、自由の推進といった美しい言葉で飾られることがあります。帝国の神学は神の思し召しという名のもとに抑圧の事実を隠すための強力な道具となります。人々を『私たち』と『彼ら』に分けてしまう神学だからです。その神学は『彼ら』の人間性を奪い、悪魔だと教えます。土地のことを語りますが、そこに住んでいる人のことを語りません。そこに住んでいる人がいると知りながらです。帝国の神学はガザを空っぽにしると言います。…『主よ、いかがでしょうか。彼らを焼き払ってしまうように、天から火を呼びもとめましょうか』と、彼らは言います。これが帝国の神学です。」

「欧州の友人たちよ、人権や国際法について私は二度とあなたたちの説教を聞きたくはありません。あなたたちの論理では、白人でない私たちは人権や国際法の対象ではないようだから。この戦争で、西洋の多くのキリスト者は帝国側に必要な神学を用意しました。私たちは言われた、これは『自衛だ』と！（どうしてそんなことが言えましょうか？）帝国の影で、侵略者が被害者にすり替えられ、土地を奪われた人々は加害者に仕立て上げられた。イスラエルがガザと同じような人たちの町や村のがれきの上に創られた国であることを忘れてしまったのですか？私たちは教会の加担に憤っています。はっきりさせておこう。沈黙は加担だ。停戦と占領の終わりを呼びかけることなく平和を口にするこも、直接的な行動を伴わない浅はかな慰めの言葉も、全て加担の一部だ。」

「私のメッセージはこうです。今のガザは世界の道徳を測る方位磁針です。10月7日以前も、ガザは地獄にあったのです。もしあなたが、ガザで今起きていることに魂が揺さぶ

られないとしたら、それはあなたの人間性がおかしくなっているということだ。もし私たちがキリスト者として、大量虐殺やその正当化のために聖書が使われることに憤慨しないのであれば、私たちのキリスト者としての信仰はどこかおかしいのであって、それは福音を貶めていることになります。あなたがもしこれを虐殺と呼ばないなら、それはあなたの責任です。それはあなたが自ら選んだ罪であり闇となります。」

「悲しみ、苦悶、そして嘆きの中で私たちは神を探し求めました。そしてガザの瓦礫の下に見つけたのです。イエスは私たちと同じく〈帝国〉の暴力の犠牲者となりました。拷問を受け、磔にされ、痛みの中叫びました。— わが神よ、あなたはどこにおられますかと。今日のガザで、神は瓦礫の下におられます。そしてこのクリスマス、私たちがイエスを探し求める時、イエスは、ローマ帝国の建てた壁のローマ側ではなく、壁のこちら側、私たちの側におられます。家畜用の洞窟の中、貧しい家族と共に。脆く、かろうじてそして奇跡的に虐殺を逃れた身として、難民となり、迷い歩く家族の中に、ここにこそイエスはいるのです。」

「もしイエスが今日生まれるとしたら、ガザの瓦礫の下で生まれることでしょう。人が誇りや豊かさを讃える中、イエスは瓦礫の下にいます… 私たちの世界が力と武器に頼る中、イエスは瓦礫の下にいます… 私たちの世界が子どもたちへの爆撃を正当化し、理屈づけ、神学化する中、イエスは瓦礫の下にいます… イエスは瓦礫の下におられます。ここが彼の飼葉桶です。イエスは苦しむ人々、抑圧された人々、家を追われた人々、社会に軽んじられた人々と共にいます。そこが彼の飼葉桶です。この象徴的なイメージを見て深く思うのです。まさしく、神はこのようにして私たちと共におられる。ぼろぼろにされ、血まみれで、貧しい。これが、神が人となられるということなのです。」

「この飼葉桶は、レジリエンス（回復する力）を表しています。アラビア語では『スムード』です。イエスのレジリエンスは、その柔和で脆く弱いところにあります。受肉の輝かしい栄光は、周辺に追いやられた人たちとの連帯にあります。なぜレジリエンスかという、この幼子は苦痛、破壊、暗闇と死の真っ只中から立ち上がって帝国に異を唱えたからです。権力に対して真理を語り、死と暗闇に永遠に勝利する道を示したからです。」

「イエスの生まれ故郷ベツレヘムのクリスマスは、この飼葉桶です。これが世界に向けた私たちのメッセージです。それは福音のメッセージです。これこそが本来の真実なクリスマスのメッセージです。神は沈黙しておられなかった。神の言葉があった。その言葉はイエスだった。イエスは、占領され周辺に追いやられた人々の間で生まれた。イエスは私たちの痛みと壊れやすい現実に取り添って連帯しているのです。この飼葉桶は世界に対する私たちのメッセージです。端的に言ってこういうことです。この虐殺は今すぐ終わるべきだ。世界の人々のために繰り返します。このジェノサイドをとめなさい。これが私たちの呼びかけ、私たちの嘆願です。私たちの祈りです。神よ、私たちの祈りを聞き入れたまえ。アーメン」

フランスの哲学者シモーヌ・ヴェイユは子どもの頃、親から「中国人の子どもたちは貧しくてお菓子が食べられない」と聞いて、「じゃ、私も食べない」と言って、食べなかったという。困難にある人に共感する感性に驚く。だから、彼女はあのような生き方、あのような哲学をしたのである。私のガザの人々の困難との共感も貧しい。わずかばかりの募金と、駅前のスタンディングで、イスラエルの暴虐を止め、ガザに平和をと訴えるだけである。イサーク牧師の激しく、真に福音的な説教を真正面から受け止めたい。